執念の鼠

正義の牙で虚像を喰う

（第一勧銀の行内報十月号より）

久　琢　磨

米騒動の火

大正七年（一九一八）八月十二日夜、神戸の湊川神社に集まった二万人余の群集は奔流となって坂をくだり始めた。流れはおのずから三筋にわかれた。一隊は東へ、一隊は西へ、米屋を求めて折れていく。本流をなす第三の隊は、そのまま一気に流れ落ちて、東川崎町にある鈴木商店本社を目指した。

富山市に端を発した米騒動の火の手が、いまや米買占めの首魁（しゅかい）と目された鈴木商店に飛び火したのである。

木造三階建てのその本社は全く無防備であった。投石が始まる。瓦がとび、ガラスが割れ、そのたびに群集の喚声があがる。

戸が壊され人々が侵入した。手あたり次第に帳簿や道具類が投げ出され、あげく二カ所に火がつけられた。炎がたちまち建物を包み柱や棟木が音をたてて焼け落ちる。

それに群集が叫び声をあわせる。

第一次世界大戦の当時、鈴木商店は新興の商社として三井物産、三菱商事と天下を三分する勢いであった。七つの海に鈴木の船は雄飛した。神戸製鋼、日商岩井の分身である日商、石川島播磨重工業の分身である播磨造船所、帝人の前身である帝国人造絹糸、豊年製油などが子会社として作られた。その大商社がいま『米を買占め価をつりあげている』（注1）として糾弾されているのである。

しかし奇妙なことに、歴史の一ページにはっきりとそう記されているにもかかわらず、買占めの事実はなかった―これが、この焼打ち事件の追跡調査を行なった作家の城山三郎氏の結論である。（注2）

鈴木商店米買占め説の根拠となっている証言は事実に基づいたものではなかった。城山氏の調べでは、それは噂にもとづく憶測でしかない。そしてその噂のもとは、大阪のA新聞がしつこいように繰返した報道であった。

〝例の鈴木商店〟

米騒動の二年前、すでにA紙は鈴木商店糾弾の一矢を放っている。鈴木がひそかに敵国ドイツに米を積み出した、という記事がそれである。これは誤報であった。A紙もそれを認めた。しかし「国賊鈴木」のイメージは一片の訂正記事だけで容易に消えはしない。

大戦中小麦粉取引で鈴木のあげた利益は莫大なものであった。買いは鈴木一社。〝打倒鈴木〟と売浴せた末敗れた他社は、決済のために市中の八百屋にまで社員を派して小麦粉を買い漁らねばならなかった。しかしそれは鈴木商店の行為と誤伝された。「買占めの鈴木」「もうけのためには手段を選ばぬ鈴木」のイメージが定着していく。

戦争は日本に異常な繁栄をもたらした。連合国からの軍需品の受注と、先進国が輸出余力を失ったアジア市場への進出によって、輸出額は四年間で三倍となった。大量の外貨流入はインフレを激成した。米もその例外ではなかった。端境期を迎えて米を買っておけばもうかること確実であった。米の仲買人の買占め、農家の売惜しみ、消費者の買漁り―仮需は仮需を呼んで米価は暴騰の一途を辿った。まさに今年初めのトイレットペーパー不足騒ぎと全く同じ現象が生じたのである。

A紙はこうした現象の背後に『例の鈴木商店』が潜んでいると―『真偽もとより明らかならず』とことわってはいたが―報じた。

鈴木は政府の依頼に応じて朝鮮米を移入して、大正七年八月五日から大阪その他で市価よりも格安に売り始めたが、それすらもA紙の攻撃の的となった。群集が公設市場に殺到する光景を報ずる記事には

『この惨状を何と見る！僅か五升の白米を得るに炎天下に数時間を立尽くす』

というセンセーショナルな見出しがつけられ『丸で施行米（せぎょうまい）でもして貰うやうな有様である』と書く。そして大衆がそんなに苦しんでいるのに「例の鈴木商店」は多額の仲買料をえて大もうけしている、と叩き続けた。

当時鈴木商店をしょって立っていたのは金子直吉であった。典型的な土佐っぽである金子は、大新聞の影響力を無視し続けた。「鈴木はなにも悪いことなどしていない。いつかきっとわかる」―それが彼の口癖であった。しかしA紙の筆によって破局への道が着々と作られていったのである。

A紙が、鈴木商店を悪者に仕立てて攻撃したのには理由があった。憲法を無視して成立した寺内内閣、とくにその中心をなす後藤新平を叩くためであった。金子から後藤にかなりの政治資金が出ていたから、A紙は金子を同じ穴のムジナと見たのだ。事実にあっているか否かは、当時護憲の使命感に燃えるA紙編集陣にとって、どうでもよかったに違いない。その意図の善悪はともあれ、「例の鈴木商店」の悪らつぶりは、A紙の作り出した虚像であった。城山氏は、重なる攻撃によって、この虚像が、民衆には実像となったのだ、と結論づけている。

風雨強かるべし

私は城山氏の作品を読みながら、最近の大企業告発の風潮と思い比べて、歴史は繰返すの感を覚えずにはいられなかった。国民の不満のうっせきするところ、必ずスケープ・ゴート（いけにえのやぎ）が求められ、それが往々にしてマスコミの力で作られていく。大企業＝悪とされる。中でも銀行は大企業に資金を供給するゆえに「諸悪の根源」と目される。全国消費者団体連絡会はその線に沿って「インフレと金融のからくり」というパンフレットを作成し、大企業への融資の源資を断つために銀行から預金をおろせと呼びかけようとしている。「銀行を告発する会」も結成された。商社の次は銀行だ、と囁かれている。嵐は近づいているのである。

こうした風潮に対して、私どもはどう対処したらよいのか。鈴木商店の金子直吉のように「いつかわかってもらえる」とほうっておくことは、今の情報社会の中では愚かしい。銀行の正しい実像を知ってもらうためにマスコミに働きかけ、マスコミを活用せねばなるまい。そうした「銀行」一般に対する攻撃への対応策は個人の手には余るから、銀行界全体で真剣に考えてゆかねばならぬだろう。行員ひとりびとりは、銀行の分担する社会的経済的機能を完全に果たすことによって市民のニーズにこたえるのが最善の対策ではないだろうか。具体的にいうなら、預金・為替などの事務処理を正確迅速に行ない、口座相違、出納過不足などを絶滅することである。窓口での笑顔とか地域社会に融けこむための地元の祭りへの参加とかは、もとより欠かせないが、早くて間違いのない事務処理抜きでは、それが空しいものとなる。

正直いって「心のふれ合い」のキャッチ・フレーズは虚像かも知れない。謙虚に反省するとき私どもの日常はこのことばから遠いのだから。しかしこの誓いをあえて掲げることによって自らを拘束し励まして、親切でお客さまの立場に立った応対をしよう、ということなのだ。そしてこの虚像が私どもの努力によってDKBの実像となったとき、初めて当行は地域社会の中にがっちり根をおろし、告発の嵐に耐えうるようになる。

高僧とむく犬

さて、実像と虚像は企業にのみあるのではない。人にもこの問題はついて離れない。

『西大寺の静然上人（じょうねん）（しょうにん）、腰かがまり、眉白く、まことに徳たけたる有様にて、内裏にまいられたりけるに、西園寺の内大臣殿、「あな尊（とうと）の気色や」とて信仰の気色ありければ、資朝卿これを見て、「年のよりたるに候ふ」と申されけり。後日にむく犬のあさましく老いさらぼいて、毛はげたるを引かせて、「この気色尊く見えて候ふ」とて、内府へまいらせられけりとぞ。』

これは兼好法師が「徒然草」に書き記している痛烈な話だが、人の心の中が見抜けぬものであり、外観や表面にあらわれる言行で判断する外はない以上、見る人の好み、傾き、偶然の成り行きに左右されて、実像とはかなりかけ離れた虚像が容易に作られる。そして それで是非が論ぜられ評価が行なわれる。それを逆用して虚像を美しく飾りたてて人眼をあざむき、それによって出世し富を作ろうとする人も跡を断ない。いわば人は、黒々とした実像の回りに、淡い（良きにつけ悪しきにつけ誤解の結果である）虚像をまとい つかせて社会の中で生きる。しかも往々にして実社会の中で意味をもつのは、むしろ本来なら淡かるべきこの虚像である。

前回私は人が人と交わるとき、相手をかけがえのない独自の存在としてとらえねばならぬ、それには長い時間とそれを支える愛情、尊敬が必要だ、と書いた。しかし現実には私どもはすべての人との接触においてそんなに時間が与えられてはいない。従って時間をかけて自分で本当に確かめえぬ間は、すべての評価に〝？マーク〟を付して置く心がけが必要であろう。それと同時に自分の好悪をできるだけ抑えて、その人の実像をつかむ努力を忘れてはならない。

今までをふりかえってみたとき、誤解されてくやしく情なかったこと、善意をもって信頼してくれる人のいることが心の支えになったことがどんなに多かったことか。人ひとりを真に理解することは本当にむづかしい。そのことを私どもは謙虚に認めて、もし判断を誤るのなら、せめて良い方へ誤ろうと心に決めてこれからを生きていきたいものだ。

東都古刹めぐり (6)

嶋内義治

本年昭和五十年の新年は辰巳会全国統合結成十五周年、又昭和時代半世紀を酬する記念すべき新年であるので辰巳会会員諸賢の益々の御健康、御長寿を御祈り致し度く寿命、有福、人望、清廉、愛敬威光、大量の七福を授けて下さる七福神を御紹介し其の御加護を戴く様御願いする事にしたい。

東部の七福神崇拝は江戸文化の華やかであった文化、文政の頃（一八〇四―一八二九）当時江戸市民に四季を通じ最も良い行楽地として親しまれた隅田川東岸の地に招福七福神に夫々縁故をもつ神社仏閣のあるのが発見され、初春七草の間に寿福を祝い家門繁昌を願う初参りの行事が創始されたのが始まりであると云う。爾来七福神詣は年々盛んとなり現在では古来よりの隅田川七福神めぐりの外、山手七福神、柴又七福神等都内のみでなく武蔵野七福神、横浜港北七福神、三浦海岸七福神等各方面の七福神めぐり参詣の観光バスが行われ最近とみに信仰者が増加している様である。

今回は此の多数の内より名門と思われる七ケ所の七福神を御紹介することとしたい。

七福神の神々については今更改めて申述べる事は無用であり非常な蛇足と考へられるが先づ順序として神々の戸籍調べの様なものを簡単に記述したい。

七福神の神々の崇拝は室町時代